

## 首里城正殿大龍柱の向きの検討

—近代における大龍柱「改変」史から—

後 田 多 敦

SHIITADA Atsushi

非文字資料研究センター研究員 神奈川大学国際日本学部教授

【要旨】本稿では、首里城（沖縄県那覇市）の正殿正面石階段の登り口両側に設置されていた大龍柱と呼ばれている一対の龍柱の向きを検討した。大龍柱は首里城の特徴を象徴する造形物の一つ。琉球国末期からの大龍柱（3代目とされる）は首里城が接収された以降、破壊と向き改変がなされたため、本来の向きについては二つの見解がある。これまで、向き合う形だとする説（相対説）と正面向きだとする説（正面説）が対立しているが、本稿では首里城接収直前から、近代における大龍柱の向きを検証し、本来の向きは正面向きだったと結論づけた。

琉球国の王城だった首里城は1879（明治12）年に明治政府の「琉球処分」で接収された後、日本軍が駐屯したほか学校や沖縄神社などに利用され、1945（昭和20）年の沖縄戦で破壊された。戦後は一時、琉球大学用地として利用された後、1992（平成4）年には正殿などが復元（平成復元）された。平成復元では「1712年頃再建され1925年に国宝指定された正殿の復元を原則」とする方針が採用され、大龍柱は「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」（1768年成立、以下「寸法記」）などの絵図資料を基に向き合う形（相対向き）で設置された。この正殿を含む復元された建物8棟などは、2019（令和元）年10月31日未明の出火で焼失している。

平成復元が採用した相対説の「寸法記」絵図解読は、首里城接収後に駐屯した日本兵によって大龍柱の向きが正面に変えられたことを前提にしている。本稿ではその前提を検証対象とし、現在確認されている最古の首里城正殿写真（1877年撮影）などから、首里城接収を挟んだ時期以降の明治大正期における大龍柱の形状変化を検討した。そして、向きは日本兵によって改変されたのではなく、沖縄神社拜殿としての正殿修復＜1928（昭和3）年から1933（昭和8）年＞で相対向きに変えられる以前は正面向きだった事実を示した。その上で相対説の「寸法記」絵図理解の前提が成立しないことを実証し、相対説は絵図資料を「誤読」していると指摘した。

これらの検証を通し、本稿は3代目大龍柱の「本来の向き」は、平成復元が基準とする1768年から正面向きだったと結論づけている。

A Study on the Orientation of Dairyuchu, the Dragon Pillars of Shuri Castle's Seiden  
(Main Building)  
— A History of Changes in Dairyuchu's Orientation in Modern Times—

**Abstract** : This paper examines the orientation of the dragon pillars of Shuri Castle located in the city of Naha, Okinawa Prefecture. Dairyuchu, as the two pillars are called, flank the stone steps ascending to the front entrance of the Seiden, or main building, and are one of the symbolic features characteristic of the castle. Because the pillars, which are believed to be the third incarnation of Dairyuchu erected during the last years of the Ryukyu Dynasty, were damaged and rotated in the years after Shuri Castle was seized, there are two opposing theories as to which direction the pillars' front side originally faced. The face-to-face theory states that the pillars faced each other, while the front-facade theory claims each pillar stood facing front. This paper analyzes the orientation of Dairyuchu in the timeframe right before Shuri Castle's seizure to modern day and concludes that the two pillars originally faced front.

Shuri Castle, formerly the palace of the Ryukyu Kingdom, was seized during the annexation of the kingdom by the Meiji government in 1879. The castle was subsequently used as military barracks and school buildings, converted into Okinawa Shrine, and eventually destroyed in 1945 during the Battle of Okinawa. After the end of the Pacific War, the castle site temporarily served as the grounds of Ryukyu University before the Seiden and other structures were reconstructed in 1992. This Heisei-era reconstruction project was carried out on the principle of reproducing the Seiden rebuilt around 1712 and designated as a National Treasure in 1925. Under this project, the dragon pillars were placed facing each other based on the 1768 drawing of Momoura soeudon fushintsuki miezu narabini ozaimoku sunpouki ("Sunpouki") and other such historical materials. On October 31, 2019, the eight buildings reconstructed under the project, including the Seiden, were burned down in an accidental early morning fire.

The Heisei-era reconstruction project adopted the face-to-face theory based on an interpretation of Sunpouki that assumed the pillars were turned face front by Japanese soldiers who occupied the castle after its seizure. This paper examines the validity of this assumption by studying the changes in the dragon pillars' form in the years following the castle seizure, during the Meiji and Taisho periods, using what are currently known as the oldest photographs of the Seiden taken in 1877. Our study demonstrates that the orientation of the pillars was changed not by Japanese soldiers but as part of the renovation undertaken from 1928 to 1933 that transformed the Seiden into the Haiden (hall of worship) of Okinawa Shrine, and that prior to the renovation, the pillars in fact stood facing front. We show that the assumption used to interpret Sunpouki was false and argue that the face-to-face theory is actually the result of misinterpreting the drawing.

This study leads us to conclude that as of 1768, the year the Heisei-era reconstruction project used as a point of reference, the correct orientation of the third incarnation of Dairyuchu was face front.

## I はじめに

首里城（沖縄県那覇市）の正殿から2019年10月31日未明に出火し、正殿を含む建物8棟と施設内に展示、保管されていた文化財などが焼失した。焼失した正殿は沖縄の「日本復帰」20周年を記念して、1992年に復元（以下、平成復元）されたものだった<sup>(1)</sup>。この平成復元事業は1992年以降も続けられ、正殿背後の御内原と呼ばれるエリアなどの整備が終わり公開されたのは2019年2月である。首里城が全貌を現した段階での火災は、多くの人に衝撃を与えることになった。現在、復旧作業が進められている。

首里城などは2000年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録され、かつての琉球国の歴史や文化を伝える施設として親しまれてきた<sup>(2)</sup>。一方で、復元をめぐり当初から異論がくすぶっていた。その一つが、正殿正面石階段の登り口両側に設置されていた大龍柱と呼ばれている一対の龍柱の向きへの異論だ。平成復元では「1712年頃再建され1925年に国宝指定された正殿の復元を原則」とする方針が採用され、大龍柱は絵図資料を基に互いに向き合う形（相対向き）で設置された（写真①<sup>(3)</sup>）。これに対し、住民などから御庭に向く形（正面向き）が「本来の向き」だという声があがっていた（正面説）。現在確認されている明治大正期の写真の全てで、正面向きであることも正面説を後押しした。2019年の正殿焼失後に正面向きにすべきだという声が再び大きくなり、「本来の向き」をめぐり議論が改めて活発化している<sup>(4)</sup>。

復元の基準とされた時代、大龍柱はどこを向いていたのか。「本来の向き」は相対向きか、それとも正面向きか。明治政府に首里城が接収される前から、大龍柱の形状変化を検証し、「本来の向き」を解明することが本稿の課題である。明治大正期の向き形状の変化を確認することが、なぜ「本来の向き」の解明に結びつくのか。それは平成復元で採用された相対向き（相対説）が、首里城接収後（沖縄県設置後）に日本兵によって大龍柱の向きが正面に変えられたことを前提にすることで成立している



写真① 火災前の正殿と大龍柱。平成復元で、大龍柱は互いに向き合う形（相対向き）に設置されていた。2014年に筆者が撮影

からである。そのため、接収後の正面へ向き変更という事実が存在しなければ、これまでの相対説は成立しない。その点で、明治大正期の向き問題は根本的な論点となる。

このような問題意識から、本稿では首里城接収を挟んだ時期以降に着目し、写真などを資料として明治大正昭和戦前期の大龍柱の形状変化を明らかにする<sup>(5)</sup>。そして、結論を先取りすれば、3代目大龍柱の「本来の向き」は正面だったことを示したい。

## II 問題の所在と背景

### (1) 基本的な前提

大龍柱の向きを検討する前に、首里城に関連する基本的事項を一瞥したい。<sup>(6)</sup>首里城は14世紀末ごろには既に存在していたと推定されているが、創建の年代を伝える直接的な文献資料は確認できない。琉球国中山王の王城としての首里城は15世紀初期までには成立していたと考えられている。城郭外苑の龍潭池畔に建立された「安国山樹華木之記碑」(1427年)には、国相懐機が外苑に人工池を掘り花木を植えて遊覧の場としたなど、外苑整備事業の経緯が刻まれている。<sup>(7)</sup>この「安国山樹華木之記碑」建立以前には、城郭内の整備がなされていたことになる。

中国大陸で明を建国した朱元璋(洪武帝)は1372(洪武5)年、楊載を琉球国へ派遣し進貢を求めた。察度王はこれに応じ弟泰期を派遣した。これが琉球国から明への進貢使節派遣の始まりとされる。次王の武寧は1404(永楽2)年に明皇帝の冊封を受け、琉球国王に対する冊封の始まりとなる。琉球国が明の冊封使節を受け入れ、各種の儀礼を行うには相応の施設が必要となるので、その時期には王城としての整備がなされていたと考えていだろう。東アジア諸国の政治的な動きに連動する形で琉球国も主体として登場し、その過程で王城として首里城が整備されたと考えたい。

王城としての終わりは、1879(明治12)年3月29日に最後の国王尚泰が退城し、明治政府に接收されたときである。首里城は日本による琉球国併合過程で接收され、1896(明治29)年まで日本軍(熊本鎮台など)が管理・駐屯した。日本軍撤収後は、建物などから段階的に払い下げられ、最終的には1909(明治42)年、土地の所有権も首里区に移った。城内に学校などが置かれたほか、大正末には沖縄神社も創建された。沖縄戦時には地下に沖縄守備軍第32軍司令部壕が建設されていたこともあり、日米の戦闘で破壊された。戦後の米国占領統治下で、首里城跡地には琉球大学が設置されていたが移転し平成復元がなされた。跡地の主要部分は国有だったため、平成復元は国の事業として行われた。

首里城を考える上で、名称をめぐる問題も重要なので触れておきたい。現在、首里城と呼ばれているが、それは本来の名称ではない。明治政府による接收以前は、琉球国の国王が居住する王宮であり、御城(ウグスク)と呼ばれていた。正殿は百浦添御殿、国殿、唐玻豊と称され、大龍柱は「御柱」と呼ばれていたという。現在一般的に使用されている名称は、必ずしも本来のものではない。

また、首里城を日本各地のいわゆる「お城」のイメージで理解すると、誤解を招くことになる。王城である首里城の特徴は、国王が居住する王権の拠点であり王城・王宮だという点にある。日本には王権の拠点だった「お城」は存在しない。あえて挙げれば、平城宮や平安宮だろうか。江戸城が皇居となったのは、明治になってからだ。日本の「お城」は軍事や領主などの拠点である。これに対し、首里城の主体は国王であり、そこでは王権にかかわる儀式や外交使節を迎えた外交儀礼が行われた。加えて、王権の正当性を担保する国家祭祀が営まれる場でもあった。御城だった首里城には、王の代替わりの際、中国の明・清から冊封使節が訪れた。首里城でも400年以上の歴史がある。首里城は冊封儀礼も前提とした空間だったのである。

首里城の各種の特徴は、平成復元事業でも強調されてきた。例えば、首里城正殿は3階建てだが、アジアで3階建ての王宮は琉球国以外に存在しないなど、復元を担当した人々の論考でも、首里城の

独自性は強調され説明されている。王権の拠点であることが基本的で本質的な特徴である。この点を欠落させると、御城の構造や空間、意味の理解を誤ることになる。大龍柱の向きを考える上でも不可欠の前提となる。

正殿大龍柱は初代が1509年の製作とされ、その後正殿火災などを受けて製作され直されている。復元の基準(1768年)とされる大龍柱は、謝敷宗逢がニービスフニと呼ばれる細粒砂岩で製作した3代目とされている。3代目は明治期に日本兵に折られ、その後接続されるなど補修されて背丈が短小化した。そして、沖縄神社としてなされた昭和修復(昭和3～8年)で、向きが相対に変えられた。その後、沖縄戦で損壊している。戦火をくぐり抜けた大龍柱の残欠が幾つかあり、3代目とされているものは4代目である可能性も否定はできないという。ただ、現段階では向きの議論と直結していないので、本稿では3代目とする一般的な見方を踏襲したい。

## (2) 「琉球処分」、そして復元と資料

明治政府による19世紀後半の琉球国併合事業は「琉球処分」と名付けられ、琉球王権や王城の接管、沖縄県設置、最後の国王尚泰の東京連行などが実施された。この「琉球処分」を現場で指揮したのは、処分官で内務省大書記官の松田道之だった。松田は1879(明治12)年3月27日、琉球藩の廃止と沖縄県設置を宣言し王城の明け渡しなどを命じた。最後の琉球国王の尚泰は1879年3月29日、王城を立ち退き世子屋敷(中城御殿)へ移った。

尚泰の退城後、「琉球処分」で派遣された日本軍(熊本鎮台)が首里城に駐屯した。事実上の首里城の主体変更は1879年3月29日である<sup>(8)</sup>。以降の大龍柱の変化は、「改変」と位置づけることができる。日本軍の琉球への駐留はそれ以前からなされていた。日本軍(熊本鎮台歩兵第一連隊の一分隊)は1876年7月、琉球に初めて派遣されている。当初は賃貸施設を利用していたが古波蔵地区に兵舎

表①「首里城関連略年表」		
年代	事項	大龍柱向
不明	首里城創建	
1372	察度が明皇帝の求めに応じ弟泰期を明へ派遣	
1404	武寧王が明皇帝の冊封使節を迎える	
1427	「安国山樹華木之記碑」建立	
1453	志魯・布里の乱=焼失	
1456	このころまでには首里城再建	
1509	大龍柱製作・設置(初代)=輝緑石	
1660	首里城火災	
1667	大龍柱製作(儀保為直作、2代)	
1671	首里城再建	
1709	首里城火災	
1712	(～15)首里城再建	
1715	大龍柱製作(謝敷宗逢作、3代)	正面
1729	正殿の大規模修復	
1767	正殿の大規模修復(～78)	
1768	*『寸法記』成立(平成復元の基準)	相対*正面
1811	正殿の大規模修復	
1846	正殿の大規模修復(琉球最後の修復) *『百浦添御殿普請日記』ほか	
1877	正殿火災一部損壊、ルヴェルトガが正殿撮影	正面(原型)
1879	尚泰が首里城を明け渡す。沖縄県が設置された	正面(原型)
	首里城に日本軍駐屯	正面(原型)
1882	ギルマールが沖縄訪問	正面(原型)
1887	このころ大龍柱の右側が折られる(損壊)	正面(片方)
1893	チェンバレンが沖縄訪問(左側短小、右側損壊)	正面(片方)
1896	首里城から日本軍撤収	正面(短小)
	日本兵が大龍柱を破壊(左右別時期)	正面(短小)
	大龍柱を補修(短小化し接続。左右別時期)	正面(短小)
1904	レブンウォース琉球訪問(両方短小)	正面(短小)
1925	首里城内に沖縄神社創建、「特別保護建造物」指定	正面(短小)
1928	「正殿」が拝殿として修復(～33年。相対向きに変更)	相対に改変
	*『国宝建造物沖縄神社拝殿図』	相対(短小)
1929	「国宝」(国宝保存法)	相対(短小)
1945	沖縄戦で首里城破壊。3代大龍柱も損壊	相対(短小)
1992	平成復元	
	大龍柱製作(西村貞雄作、4代)	相対で復元
2019	正殿など焼失	

\*『首里城の復元』などを基に、本稿の事項なども加えて作成

を建設し、同年9月からそこを拠点とした。「琉球処分」の最終段階の1879年3月25日、熊本鎮台兵士のおよそ400人が松田道之に従って追加で着任した。そして、「琉球処分」を武力的な側面から担った。

松田道之は1879年3月27日に首里城の明け渡しなどを命じ、城門を閉鎖して城内に保管されていた琉球国の国家運営に関する書類を差し押さえた<sup>(9)</sup>。さらに、城門に検問所を設け持ち出しをチェックしている。明治政府が接收した琉球国の資料は、その多くが関東大震災で焼失したといわれている。一方で、琉球側が首里城から持ち出すことのできたものは限られていた。持ち出したものは、退城後の尚泰が仮寓した世子屋敷（中城御殿）で管理され、さらにその中の一部は東京の屋敷に移された。

首里城内の資料は、明治政府に接收されたもの（Aグループ、関東大震災で焼失）と琉球側が持ち出したもので、戦前の中城御殿（尚家沖縄屋敷）で保管されたもの（Bの1グループ、沖縄戦で散逸）と戦前に東京（尚家東京屋敷）に移されたもの（Bの2グループ、戦後に那覇市へ寄贈ほか）と三つのグループに大別できる。現在に伝わるのは大きくみれば「Bの2グループ」のみで、ほかの資料は散逸している。

平成復元では資料の少なさも課題となったという。首里城接收後の資料の行方を一瞥するだけでも、困難さは理解できるだろう。平成復元事業は、基本的な資料の収集確認作業から始める必要があったのである。復元に活用された基本情報は順次公表され、根拠資料などは『首里城関係資料集』に収録された<sup>(10)</sup>。

『首里城の復元』は、復元が依拠した主な根拠資料として以下の8グループを挙げる<sup>(11)</sup>。いずれも一級資料であることに異論はない。興味深いのは、最初に挙げられたものが昭和修復<1928（昭和3）年から1933（昭和8）年>の際に作成された『国宝建造物沖縄神社拝殿図』という点だ。列举の順番も大事だと考えると、注目すべきだろう。以下の下線のある資料の①から⑥のほか、写真、絵図、拓本、遺物資料など関連資料は『首里城関係資料集』に収録されている。資料は基本的に公開された。

- ①『国宝建造物沖縄神社拝殿図』（昭和3～8年＝1928～33年）＝沖縄県立図書館蔵
- ②『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（乾隆33年＝1768年）＝沖縄県立芸術大学蔵
- ③『図帳（シードウホウ勢頭方）』（1839年の写、原本成立時はそれ以前）＝沖縄県立芸術大学蔵
- ④『図帳（アタイホウ当方）』（『図帳（シードウホウ勢頭方）』と同時期に成立と推定）＝沖縄県立芸術大学蔵
- ⑤『冠船之時御座構之図』（同治5年＝1866年の冊封使節来琉時）＝沖縄県立博物館蔵
- ⑥『冠船之時御道具之図』（同治5年＝1866年）＝沖縄県立博物館蔵
- ⑦尚家文書（那覇市蔵）
  - A『百浦添御殿普請日記』（道光22年＝1842年）
  - B『百浦添御普請日記』（道光22～26年＝1842～46年）
  - C『百浦添御普請日記・当方』（道光26年＝1846年）
  - D『百浦添御普請絵図帳』（道光26年＝1846年）
- ⑧新たに発見された資料
  - \*配置図（横内扶資料＝明治18年から大正2年成立、那覇市蔵）
  - \*宮内庁書陵部古写真（明治前期）＝宮内庁書陵部蔵
  - \*その他

### (3) 復元の基準と考え方

大龍柱の復元で、相対向きを採用した平成復元の基本的な考え方などを確認したい。考え方や根拠資料などについては『首里城の復元』<sup>(12)</sup>で説明され、資料自体は『首里城関係資料集』で、計画・設計については『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録—平成の復元—』(以下『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』)<sup>(13)</sup>などで紹介されているので、これらを利用し必要に応じて他の文献も参照した。

平成復元では首里城の歴史を大きく四期に分け、第四期の正殿を復元対象とした。第一期は創建から1453年まで、第二期は1456年から1660年まで、第三期1671年から1709年までとする。第四期は1712年からそれ以降とする。そして、正殿の復元に関しては「(正殿は)1712年に再建された後、建物の増改築や重修などが行われはしたものの、その建築的なコンセプトに大きな変更がないまま琉球処分を迎えたはずだ<sup>(14)</sup>」という見通しのもと、「1712年頃再建され1925年に国宝指定された正殿の復元を原則」とするとして、第四期首里城の正殿をモデルとする方針がとられた。

正殿は様々な歴史の変遷を経て、琉球建築の代表的木造建築物として存在していた。今回の復元は、1712年頃に再建された正殿が戦前まで残っていたこと、そして、その間の歴史資料の根拠が比較的是っきりしていることなどの理由により、「1712年頃再建され1925年に国宝指定された正殿の復元を原則」<sup>(15)</sup>とする。

根拠資料のなかから大龍柱の向き議論に直接関係する<『国宝建造物沖縄神社拝殿図』(昭和3～8年=1928～33年)>と<『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』(乾隆33年=1768年、以下『寸法記』)>について簡単に説明したい。『国宝建造物沖縄神社拝殿図』は昭和修復時に作成され<sup>(16)</sup>た。詳細な実測図などだが、大龍柱に関して厳密に言えば破壊と補修を経て短小化後のもの、つまり改変後のものであることに注意が必要だ。しかも、沖縄神社としての修復で大龍柱は正面向きから相対向きへ、根本的に改変されている。まさに大龍柱の向きを相対向きに変えた当事者の記録となる。

『寸法記』は鎌倉芳太郎が収集したコレクションの一つで、復元の重要な根拠資料だと位置づけられている。この『寸法記』絵図の「解説」の違いが、相対説と正面説の相違となった。現存する『寸法記』の前半部分は、大龍柱が相対向きに描かれた「御絵図」で、来歴は不明だが原本かあるいはそれに近い写本と考えられており、戦前に尚家の沖縄屋敷(中城御殿)が所蔵していた可能性が高いという。後半部分の「御材木寸法記」は鎌倉芳太郎の研究ノートにペン書きで写し取られたものである。末尾に「昭和二年四月四日於尚侯爵校了春熙」とある。『寸法記』は原本(相当)と写本を合わせることで、全体としてはじめて成立する。大龍柱が相対向きに描かれた絵図部分は原本(相当)である。

もう一つの「尚家文書(那覇市蔵)」の<D『百浦添御普請絵図帳』(道光26年=1846年)>は、尚家の東京屋敷に伝わった原本である。これは『寸法記』と全く同様の構成で、写本が含まれる『寸法記』全体の内容の正当性を裏づけるものとされている。復元では『寸法記』と『百浦添御普請絵図帳』を、同価値だと評価し位置づけた。そのため、『寸法記』絵図に描かれた大龍柱の向きを相対向きだと理解するなら、『百浦添御普請絵図帳』も同様に相対向きとなり、少なくとも1768年から1846年まで同じ向きで、変えられていないことになる。

大龍柱はこの『寸法記』絵図の向き描写や寸法に基づいて復元された。『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』の大龍柱<sup>(17)</sup>についての説明は以下となる。

#### ⑦大龍柱

正面石階段の登り口にある阿・吽形の一对の大龍柱は胴体を柱に見立てて直立し、鎌首をもたげた形態をしている。文献によると、この大龍柱は1509年に石高欄とともに正殿の前に建てられ、その時の材料は輝緑石（俗称・青石）であったとのことである。

その後、1660年の正殿焼失の際に大龍柱も破損したが、1671年の再建では再びその場所に建てられた。さらに、1709年に正殿は焼失するが、その時も大龍柱は被害を被っている。1712年頃の再建でこの大龍柱は再現された。これが戦前まであった大龍柱である。

しかし、戦前の大龍柱は高さが約1.8m程しかなかった。「寸法記」には大龍柱の高さは一丈二寸五分(3,106mm)とあり、そのことと矛盾する。これは、明治期に首里城跡地に駐屯した軍隊が大龍柱の胴体の一部を切り取ってしまった結果、全体の高さが短くなったためと伝えられている。

去る沖縄戦でこの大龍柱はほぼ完全に破壊されてしまった。戦後はこれらの残片が各機関にそれぞれ別々に保管されている。

戦前の写真では、正殿の修理が行われる以前の大龍柱は正面を向いており、修復後は互いに向き合っている。首里城を描いた絵図では正面を向いた大龍柱をよく見かけるが、「寸法記」には大龍柱が小龍柱とともに互いに向き合っている姿が描かれている。したがって、往時の形態の再現を第一と考え、大龍柱は「寸法記」と同様、向き合う形とする。

(大龍柱の写真=略)

- ・材料は発掘遺物を根拠に細粒砂岩とし、発掘遺物や戦前の写真などを基に石膏原寸原型を作製して具体的に形態を究明する。
- ・大龍柱の高さは阿形、吽形共「寸法記」の一丈二寸五分(3,106mm)とする。(図-1)

(中略)

『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』や『首里城の復元』などの説明をまとめると、復元の基本的な考え方は「1712年頃再建され1925年に国宝指定された正殿の復元を原則」とし、大龍柱については『寸法記』絵図に記載された一丈二寸五分(約3.1m)の高さと、描かれた相対向きを採用したことになる。この『寸法記』絵図の理解について、福島清は「大龍柱はこの史料(寸法記)の二箇所<sup>(18)</sup>に描かれている。初めは正殿正面から建物全体を描いた絵図で、四角い台石の上に載った大龍柱が確かに向かい合って描かれている。次は石階段部分を拡大して描いた絵図で、大龍柱、小龍柱、向拝柱、石高欄、親柱に乗る獅子、向拝柱などがリアルに描かれている。もちろん、大龍柱は明らかに向き合って描かれていることがよくわかる。大龍柱の向きについて、この王国時代に描かれた史料<sup>(18)</sup>を覆すだけの新たな資料は未だ発見されていない」と説明する。



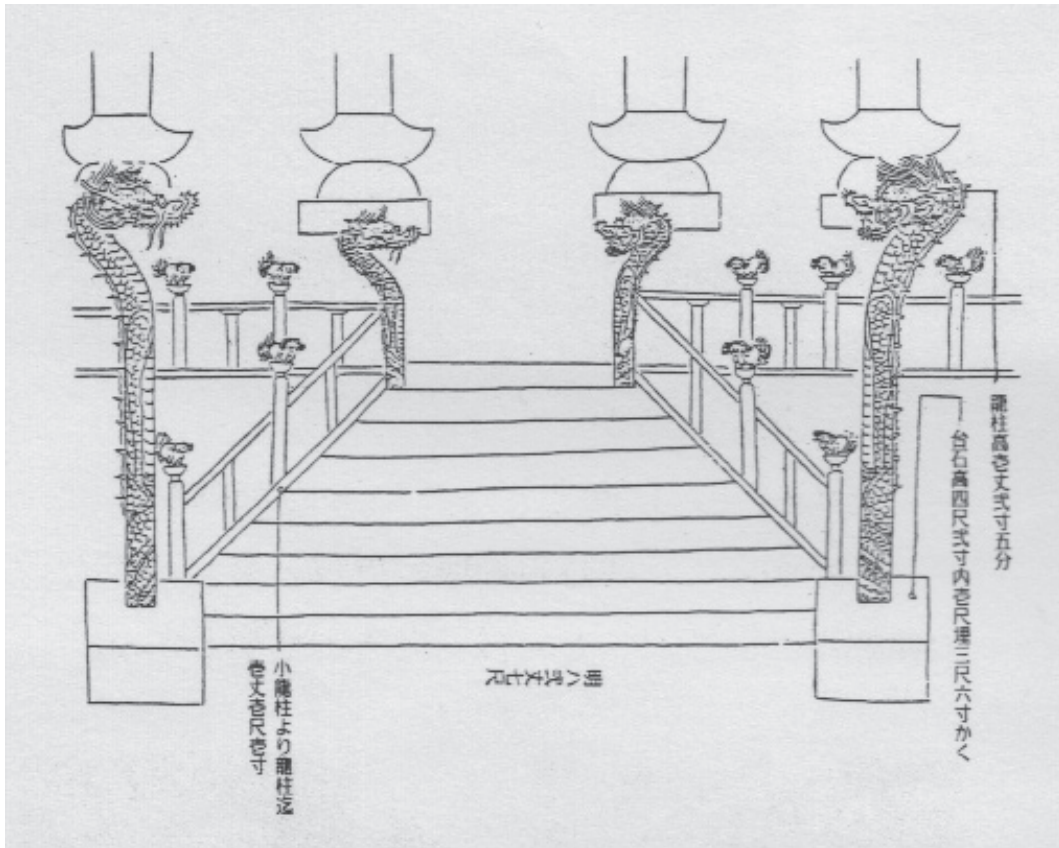


図-1 「寸法記」を調整（文字は原文を翻刻した。以下同じ）

#### (4) 先送りされた論点

大龍柱について、『首里城の復元』は「中国では建物の柱の一部に石造りの龍柱が施されていることが多いが、装飾として独立した龍柱は例を見ない。精緻で豊かな表情はもとより、鎌首を持ち上げ、尾を胴体に巻き付けて直立する形態は独創的であり、沖縄の石彫刻のなかでも最高傑作といえよう」と説明する<sup>(19)</sup>。この大龍柱についての説明は、平成復元で4代目の製作を担当し正面向き説を主張する西村貞雄（琉球大学名誉教授）と大差はない。

大龍柱についての基本的認識の違いはないが、復元の根拠資料『寸法記』絵図（引用文の「図-1」参照）の大龍柱が相対向きで描かれていることで、絵図の理解をめぐって相対向き（説）と正面向き（説）に見解が分かれた。相対説は『寸法記』絵図を「絵通り」に理解して相対向きだとし、正面説は写實的に向きを描いたのではなく、実際は正面向きだと理解した。さらに、双方が向きをめぐる主張の根拠として、ほかにも『寸法記』絵図などの解読から多くの指摘や論点も出されている。いずれにしても、絵図の解読が中心的な争点となったのは、琉球国時代の写真が確認されず、見いだされた古写真は明治大正期のもので、しかも撮影時期の特定が難しいこともあった。

さらに議論が重層化したのは、明治大正期の写真に写る大龍柱は全て正面向きで、『寸法記』絵図の「見た目の相対向き」との間に「齟齬」があったからである。この「齟齬」をどう説明するのが、相対説の根本的な課題となった。正面説に立てば「齟齬」は存在せず説明は不要だが、相対説では「齟齬」の理由を説明する必要があった。しかも、『百浦添御普請絵図帳』（1846年成立）も相対向きの根拠資料であるため、この正面への変更の時期はさらに1846年以後に限定された。

「齟齬」の理由を説明するため、相対説は置県後首里城に駐屯した日本兵が「正面向きに改変した」としている。ただ、その事実を具体的に検討しなかった。「明治期の軍隊が駐屯している間、またその後の各種学校建設によって首里城内がどのように改変されたのかは、今のところ詳細がよくわかっていないため、その写真（熊本鎮台沖縄分遣隊が駐屯した時期に撮影された正面向きの写真）だけで判断することは危険である」や「大龍柱が小龍柱とともに互いに向き合っている姿が描かれている。したがって、往時の形態の再現を第一と考え、大龍柱は「寸法記」と同様、向き合う形とする」と説明するだけだった<sup>(20)</sup>。

これに対し大龍柱を考える会などが、写真が記録する明治大正期の正面向きと、『寸法記』絵図の相対向きとの「齟齬」を主張し、正面向きへの変更を求めた。大龍柱の復元製作に携わった西村貞雄も正面向きだと主張した。市民グループは資料発掘などに取り組み、西村貞雄は構造や造形の観点や大龍柱を生み出した文化的な背景をも説明しながら、正面説を強く主張した<sup>(21)</sup>。

平成復元で重要な役割を担い相対説の立場をとる高良倉吉（琉球大学名誉教授）は、向きをめぐる論点と自身の論拠などを以下のように説明している<sup>(22)</sup>。

（前略）この両説（相対向きと正面向きのこと）の妥当性を判断するためには、琉球処分があった一八七九年（明治十二）以後に軍隊の駐屯所や学校に転用された首里城の改変・破壊の経緯を詳細に究明し、その変遷史に即して大龍柱の向きの矛盾を実証的に説明する必要がある。これが第一の論点である。第二の論点は、首里城が改変・破壊を被らない以前、すなわち琉球王国の王城として機能していた時代の大龍柱の形態を確定できるかどうかである。今回の復元に当たっては、明治以後の変遷の全体像を把握する資料が完備できなかったこともあり、第二の論点に絞って大龍柱の向きの検討が行われた。

一七六八年に首里王府が正殿重修の際に作成した『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（沖縄県立芸術大学蔵）は第二の論点を考えるうえで決定的な資料といえる。この資料は正殿各部の建築、彫刻、彩色等の仕様を詳細に述べるだけでなく、用材の加工寸法についても詳細な記述を含む工事報告書である。つまり、単なる想像や見込みで表されているのではなく、資料全体が工事施工を目的に体系的に整序され、かつ正確な仕様情報として提示されているのである。したがって、今回の復元にあたって第一級資料と位置づけられ、この資料に基づいて各部の復元が可能となった。

問題の大龍柱の向きを示す絵図を見ると、明らかに向き合っており、疑問を差し挟む余地は全くない。台座に乗っていること、向かって右手を阿形、左手を吽形と描き分けていること、上り階段がハの字型に開いて描かれていること、小龍柱も向き合あう形で描かれていることなど基壇・石高欄周りの仕様にも全く矛盾がない。明治以後に撮られた古写真の時点ではすでに失われていた親柱の上の獅子像も明確に描かれている。これほどの精度の高い仕様情報を批判する根拠は全く見当たらない。仮に百歩譲って絵画手法の誤差を勘案するとして、実際は正面向性を保持していたはずの大龍柱を向き合う形に表現したまでだ、と解釈した場合、ではなぜ小龍柱も向き合う形で描かれるのか、この矛盾を説明しなければならなくなる。また、大龍柱の向きにのみ矛盾があると解釈した場合、『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』という精

度の高い資料が、なぜこの部分についてのみ正確さを欠いたのか、その矛盾についても実証的に証明する必要がでてくる。これら二点の矛盾を証明することは不可能である。

したがって、信頼できる首里王府の公式記録（改変・破壊を被る以前の記録）は、大龍柱の形態が向かい合う形、つまり通常の阿吽様式に従っていたことを疑問の余地なく提示している<sup>(23)</sup>と断定してよい。この様式は小龍柱、大棟の龍頭棟飾、唐破風妻飾の金龍などにも一貫して表現されているのである。

高良は別の文章でも、第一の論点の重要性を指摘しつつも「琉球処分以後の首里城の変遷過程を詳細に調べあげ、その変遷過程上に大龍柱の向きを伝える写真・スケッチ等を無理なく位置づけることが求められる。私自身もこの作業を行ってみたが、現時点の史料状況では論証はとうてい不可能だと痛感し、断念した」と置県後の改変の経過を明らかにすることの困難さを述べている。また、「王国時代において、大龍柱の台座を動かすことはありえない」とも書いている<sup>(23)</sup>。

平成復元では1879（明治12）年以降の「首里城の改変・破壊の経緯を詳細に究明し、その変遷史に即して大龍柱の向き」を検討していなかった。高良の提示する第一の論点、つまり置県後の首里城（大龍柱も含めて）の改変についての検討は、先送りされていたのである。しかし、この論点は極めて重要なものだった。なぜなら、「正面向きへの変更」の存在が相対説成立の前提で、その向き変更の有無や時期は「本来の向き」を左右するからである。

本稿では、この先送りされた置県以降の大龍柱の向きの改変に着目した。具体的にいえば、日本兵は大龍柱を正面向きに改変したのか。そして改変したのなら、その時期はいつか。この点を明らかにしたい。首里城接收以前（1879年）の大龍柱が正面向きなら、日本兵による「向き改変」の事実が存在しなかったことになる。そして、それでも相対説が成立するためには、『百浦添御普請絵図帳』成立の1846（道光26）年から1877（光緒3、明治10）年（後述のルヴェルトガ写真の撮影年）までのおよそ30年間に、正面向きに変更された事実を示す必要がでてくる。しかし、相対説の高良が「王国時代において、大龍柱の台座を動かすことはありえない」と書いているように、従来の研究では1846年から1877年までのおよそ30年間における大龍柱の向き変更の事実は示されていない。

相対説を唱える伊從勉（京都大学名誉教授）は、国王尚泰の冊封儀礼に関する「首里城正殿前城元設営絵図」<1866（同治5）年>を読み解いて、1866年段階の大龍柱は『寸法記』と同じ向きだと指摘し相対説の立場から変更の可能性のある期間をさらに絞り込んだ<sup>(24)</sup>。伊從のこの説明に従えば、相対から正面への変更時期は1866年以降となり、さらに短く10年間ほどに限定される。もし、この間に変更がないなら、首里城接收直前と『寸法記』時の大龍柱は同じ向きだったことになる。

### III 写真・図版でみる置県前後の大龍柱と「改変」史

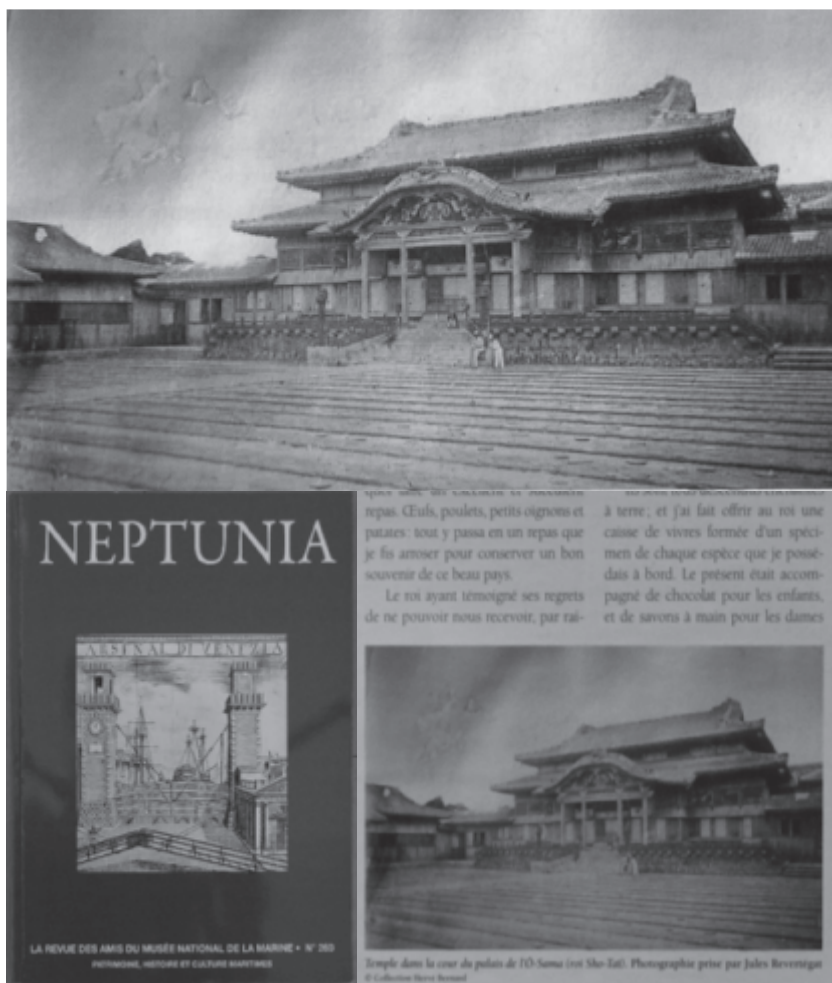
#### (1) 大龍柱の「琉球国末形状」

従来の「向き議論」では主に絵図資料が利用されたが、絵図にはそれぞれ描かれた目的があり、実際の向きを「正しく」描いているかどうかは分からない<sup>(25)</sup>。本稿では写真に着目したが、写真の難点の一つは、撮影時期や撮影者を特定できない場合が多いことだ。そこで、大龍柱の「破損」や「改ざ

ん」をとらえた代表的な写真を基に、形状変化を利用して撮影の前後などを確定し、撮影時期を絞り込むという方法をとった。

現在確認できる大龍柱を写した最古の写真は、フランス人のジュール・ルヴェルトガが1877（光緒3、明治10）年5月に撮影したものである（写図②）。この写真はルヴェルトガが乗っていたフランスの巡洋艦・ラクロシュトリ号のアンリ・リウニエ艦長（Henri Rieunier）の子孫エルヴェ・ベルナル氏（Hervé Bernard）が2010年に発表した論文で紹介し存在が明らかになった（写図③④）<sup>(26)</sup>。ルヴェルトガは1877年5月に琉球を訪れ、首里城内に立ち入ることを許可され、正殿などを撮影している。国王居城時の正殿写真は、現在この一点だけである。ルヴェルトガ写真がとらえた「正面向き+背丈高」である大龍柱の姿を「琉球国末形状」と呼ぶことにする。首里城が接収される以前、大龍柱はこの形だった。この写真によって、尚泰王が居住していた1877年5月当時の大龍柱は正面向きだったことが明確になった。そして、相対説の前提（日本兵が駐屯時に大龍柱を正面向きに変えた）は、誤りであることも確認された。

ルヴェルトガ写真が撮影された1877年の琉球国は激動の時期である。明治政府は1872（明治5）年、琉球国王の尚泰を琉球藩王に封じた。一般的に「琉球藩設置」とされる出来事である。そしてその後、



上：写図② ルヴェルトガが1877年に撮影した正殿写真。大龍柱は正面を向いている。「琉球諸島紀行」『ル・ツール・デュ・モンド（『世界一周旅行』）』（1882年度第2巻）図版の基となった

下左：写図③ ルヴェルトガ写真を紹介した Hervé Bernard 論文が掲載された「NEPTUNIA」260号（2010年）の表紙

下右：写図④ 論文の写真を紹介した箇所

明治政府は琉球国がアメリカ、フランス、オランダと結んだ条約の原本を接収、1875（明治8）年には琉清関係断絶命令、1876（明治9）年には警察・司法権移管命令を出した。ルヴェルトガ一行が琉球を訪れたのは、このように明治政府が琉球国の主権に介入を強めた時期だった。政治状況を反映しているのか、琉球国の正史『球陽』は光緒2（1876）年までで記述が終わり、ルヴェルトガ一行の記述はない<sup>(27)</sup>。

ルヴェルトガは琉球訪問の様子などを「琉球諸島紀行」（1882年）としてフランスで発表し、正殿図版も掲載していた。この図版は早くから書籍などで紹介され、西村貞雄によって正面

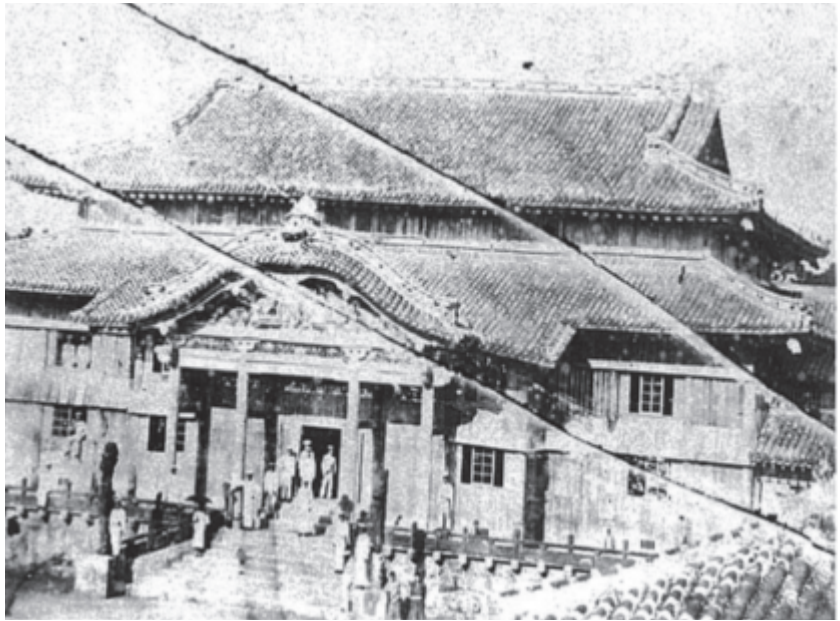
説の根拠資料の一つとして提示されていた<sup>(28)</sup>。ただ、図版だということで、相對説は資料的価値を重視してこなかった。しかし、この図版の基となるルヴェルトガ写真の存在が確認されたことで、首里城接收前の琉球国末に大龍柱は正面を向いていた事実が確定した。

## (2) 沖縄県設置後の形状（正面向き）

ルヴェルトガ写真と同じ「琉球国末形状」（「正面向き＋背丈高」）の大龍柱をとらえた写真が、ほかに2点確認できる。伊藤勝一（故人）が収集した正殿写真（以下「伊藤家首里城正殿写真」＝写図⑤、沖縄県立図書館蔵）と東京国立博物館蔵の写真（以下「東博正殿写真A」＝写図⑦）だ。ただ、この2点はいずれも撮影時期や撮影者、写真の来歴がはっきりしない<sup>(29)</sup>。

「伊藤家首里城正殿写真」には、正殿石階段や左右大龍柱の側に人物が写り、その人物と比べると大龍柱の背丈は短小化前であることが分かる。「正面向き＋背丈高」という大龍柱の形状だけでも、ルヴェルトガ写真の状態だった時期に撮影されたことは確実だ。

また、写真には洋傘をさした人物も写っており、1882（明治15）年に首里城を訪問したギルマール一行を写したものとだと考えていい。つまり、ギルマール写真<sup>(30)</sup>だ。ギルマール写真だとすると、「伊藤家首里城正殿写真」の撮影時期はギルマールが沖縄を訪れた



上：写図⑤  
「伊藤家首里城正殿写真」（新城栄徳「琉文21」）  
左：写図⑥  
写図⑤の正殿石階段部分の拡大

1882年となる。大龍柱は1882年段階でも、「正面向き＋背丈高」という琉球国末からの姿だ。

「東博正殿写真A」（写図⑦）も、左右大龍柱とも「正面向き＋背丈高」という琉球国末からの姿で、ルヴェルトガ写真と同じ形状だ。東京国立博物館は、「東博正殿写真A」など沖縄古写真23点を収蔵しているが、これらは撮影者や撮影時期が不明で、来歴もはっきりしない。ただ、撮影時期は同一ではなく、幾つかのまとまりの写真群が収蔵されたと考えられる。いずれも鶏卵紙を用い、サイズで分類すると11グループとなる。中城御殿なども首里城とされるなど、撮影場所の説明には混乱がある。

「東博正殿写真A」は大龍柱の形状から、大龍柱が折られる前、つまり日本軍駐屯期（1879～1896年）の撮影となる。この「東博正殿写真A」が貴重なのは、大龍柱のほかに御庭の浮道が写っている



上：写図⑦「東博正殿写真A」  
「琉球首里城」226（東京国立博物館蔵）  
左：写図⑧「東博正殿写真B」  
「琉球首里城正殿」228（東京国立博物館蔵）

点だ。正殿石階段前には、浮道という石階段前から御庭（うなー）の中央に延びたタイル状の瓦が並べられた道があり、また御庭には磚（せん、敷き瓦）というタイル状のものが敷かれていた。浮道は国王や冊封使などしか使用できず、磚は儀式の際に諸官が位の順に立ち並ぶ目印の役割も果たしていた。この浮道や磚を駐屯中の日本兵が破壊していた。写真には浮道が写っているの、撮影時期は浮道の破壊前となる。「伊藤家首里城正殿写真」ではアングル外で、浮道は写っていない。「東博正殿写真A」は浮道をとらえた写真とし

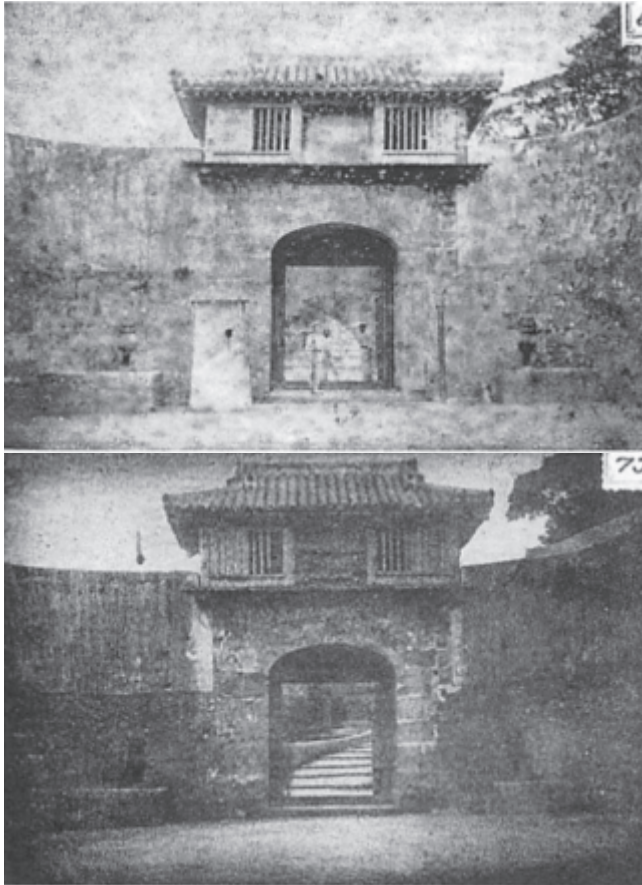
て、ルヴェルトガ写真に次いで古いことになる。正殿の扉や窓の破損状況から、撮影時期は「伊藤家首里城正殿写真」より若干下ると考えたい。

「琉球国末形状」（「正面向き＋背丈高」）の大龍柱をとらえた3点の写真の撮影時期は、古い方から「ルヴェルトガ写真」→「伊藤家首里城正殿写真」→「東博正殿写真A」の順番になるだろう。そして、「ルヴェルトガ写真」と「伊藤家首里城正殿写真」の間に首里城接收があった。

東京国立博物館蔵写真には「写図⑦」のほかにも正殿をとらえた写真（東京国立博物館の228＝以下「東博正殿写真B」＝「写図⑧」）があるが、向拝にフォーカスし浮道は写っていない。「東博正殿写真B」では左側大龍柱は確認できるが、右側は不鮮明で存在の有無も含め確認できない。扉や窓の開き方が「東博正殿写真A」とは異なっているの、別機会に撮影されたものだろう。「東博正殿写真B」は大龍柱の「琉球国末形状」写真から除外しておきたい。

沖縄古写真23点には、異なる時期に撮影された歓会門の写真2点（遠景＝含めれば3点）も含まれている。「東博歓会門A」（218、写図⑨）と「東博歓会門B」（238、写図⑩）である。「東博歓会門A」には銃を手にした兵士と駐在ボックスが写り、日本軍駐屯時の撮影だ。「東博歓会門B」には駐在ボックスがない。これは日本軍が撤収（1896年）した後の写真となる。

「東博歓会門A」「東博歓会門B」から、東京国立博物館蔵沖縄古写真23点は、少なくとも異なる時期に撮影された2グループに分類できる。そのうち一つのグループは日本軍駐屯時である。そして、「東博正殿写真A」と「東博歓会門A」はその時期に撮影されたものだろう。



上：写真⑨「東博歓会門 A」  
「琉球首里城」218（東京国立博物館蔵）  
下：写真⑩「東博歓会門 B」  
「首里城正殿」238（東京国立博物館蔵）

情報を整理すれば、「東博正殿写真 A」の大龍柱は琉球国時代の「原型」を維持し、御庭の浮道も破壊前なので、撮影時期は日本軍撤収以前で、その間でも早い時期の首里城正殿や御庭の姿を記録した写真だろう。撮影者は明治 10、20 年代、カメラをもって城内に入ることのできた人物だ。それは誰か。撮影者についての情報は足りない。1882（明治 15）年に首里城を訪れたギルマールの可能性も完全には否定できない。ただ、ギルマール撮影と考えられる「伊藤家首里城正殿写真」とは、正殿の扉や窓の状況が違っている。

ルヴェルトが写真には浮道と磚が映っている。「東博正殿写真 A」の撮影時にも磚が残っていた可能性は高い（写真自体からは確認できないが）。大龍柱は「伊藤家首里城正殿写真」「東博正殿写真」が撮られた後、日本軍が撤収する 1896（明治 29）年までの間に折られて短小化された。大龍柱は少なくとも 1882（明治 15）年段階では「正面向

き + 背丈高」という琉球国末と同じ姿だったのである。

### （3）破壊と背丈の短小化

それでは、首里城接收後（置県後）の大龍柱の破壊や改変はいつ起きたのか。明治大正期における向き改変を伝える直接の記録や資料は確認できない。しかし、この時期に大龍柱は両方とも折られ、そして接続されて短小化していたので、その形状の変化から破壊と短小化の経緯をたどることができる。

日本兵が大龍柱を破壊した事件について、比嘉朝健（1899～1945）が美術雑誌『アトリエ』で以下のように書いている。<sup>(31)</sup>

（前略）

顧みれば彼れが龍柱彫刻より、明治十二年の廃藩迄で、百六十八年間、龍柱は王廷の鎮守となり、また宝飾でもあつた。西海に沈む夕陽の残照を受けて、其れはあたかも双龍の天に冲するが如き荘厳さがあつたであらう。然るに明治十二年の廃藩となり、国論騒然たる時、我が日本は鎮圧のために憲兵隊を派遣したのであつた。

絶海孤島、弾丸黒子の一小国、永く武器を忘れし国城に来て彼等は総ゆる狼藉を働いたもの

である。<sup>ママ</sup> 或者は金銅の釘陰し盜窃し、又は柱床板を窃取し、或ひは、壁板を剥落などして、王廷は忽ち秋風落莫たるものであつた。王廷の敷瓦は微塵に彼らの堅靴に破碎され、国殿円柱は銃剣の戯撃を加へられ、欄干は兵士らの飛石飛躍の好適場になつたなかにも、野蛮なる憲兵隊長は、一身の欲望から彼れの郷里に龍柱の移送を命じたものである。武力のみを生命とする兵士等の無智に依つて、一箇の龍柱の胴体は、見事に破壊されたのであつた。其処で両方の均等を得る為め、更に完全なるものも同様、胴体を破壊したものであつたと云ふ事である。

今日なほ龍柱が六尺足らずの、哀然たる残骸を欄干に止める様になつたのは、憲兵隊長の急死した為めで、吾人は見る度毎に只だ暗涙たらざるを得ないものである。



上：写図⑪ 右側大龍柱が折られている。左側大龍柱は残されており、しかも短小化されていない（宮内庁書陵部蔵）  
下：写図⑫ 写図⑪の大龍柱の分を拡大。左側は「原型」で残り、右側が折られていることがわかる

比嘉朝健は1899（明治32）年の生まれなので、大龍柱破壊事件は伝聞ということになる。彼が実見できた大龍柱は、破壊後に補修されて短小化した正面向きだ。そして、大龍柱の向きが相対向きへ変えられたのは、「正殿」が沖縄神社の拝殿として修復された昭和修復<1928（昭和3）年から1933（昭和8）年>なので、この文章の後となる。

比嘉によれば、大龍柱は片方が先に破壊され、その後左右の均等をとるために完全だった方も破壊されたという。この証言を裏付ける写真がある。大龍柱の右側が折られ、左側が「原型」のまま立つ写真を宮内庁書陵部が所蔵している（以下「宮内庁正殿写真」=写図⑪）。

「宮内庁正殿写真」は撮影時期がはっきりしない。ただ、内閣総理大臣の伊藤博文が1887（明治20）年11月に沖縄・首里城を訪問しており、その旅程と他の書陵部写真の場所がほぼ重なることから、<sup>(32)</sup>「宮内庁正殿写真」は伊藤訪問時のものと考えられている。また、宮内庁書陵部蔵写真には歓会門に兵士の駐在ボックスが写ったものもあり、日本軍駐屯時であったことも確認できる。右側のみが折られた姿の「宮内庁正殿写真」は、伊藤訪問時の1887（明治20）年撮影で間違いないだろう。大龍柱右側は1887年段階で折られていたが、左側は損壊されずに「琉球国末形状」のままだった（写図⑫）。大龍柱の右側が折られた事件を「右側破壊事件」と呼ぶことにする。

「右側破壊事件」の時期を考える上で、興味深い資料がある。琉球国救国運動にかかわった亀川盛棟（毛有慶、1861～1893）の詩である。毛有慶は救国運動リーダーの一人だった津嘉山朝功（向龍光）



の命を受け、1884（明治17）年に仲間らと渡清している。その後、福州から1887年に帰国したが逮捕拘留された。そして、1892年に再び渡清し救国運動に合流するが、翌1893年に現地で亡くなった。<sup>(33)</sup>その亀川の詩に「右側破壊事件」のことと思われる表現がある。

日々瞻望王城不勝悲歎偶書	日々王城を瞻望しては悲歎に勝へず偶書す
城古転蒼茫	城は古く 転蒼茫たり
城荒草木長	城は荒れて 草木長ず
龍楼龍既脱	龍楼の龍は既に脱せるも
亥元旦／龍楼柱／金龍／打落	
鳳闕鳳猶翔 依然／猶飛	鳳闕の鳳は猶ほ翔ぶがごとし
本以簫笙殿	本の簫笙殿を以て
当年于／南殿御書／院使縉紳子弟／奏楽名為御座楽	
变成劔戟倉	変じて劔戟の倉となす
倭人以王宮／為屯兵之处	
一朝一翹首	一朝一たび 翹首しては
愁断九廻腸	愁に断たれ九たび腸を廻らす

「龍楼龍既脱（龍楼の龍は既に脱せるも）、「亥元旦／龍楼柱／金龍／打落」とある。「亥元旦」は1887（明治20）年元旦だろう。「亥元旦／龍楼柱／金龍／打落」が大龍柱破壊のことを示しているなら、毛有慶は1887年に帰国した際、逮捕されているが、その年の元旦に右側が折られる事件があったことになる。この元旦はいわゆる旧暦だろうから、新暦の太陽暦だと1887年1月24日となる。「宮内庁正殿写真」は1887年11月（太陽暦）の撮影で、「右側破壊事件」は1887年1月末に起きていた。

それでは1887年11月段階でも「原型」を保っていた左側が、折られたのはいつか（「左側破壊事件」）。折られた左側を確認できる最も古い写真は、バジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）の“*The Luchu Islands and Their Inhabitants*”（1895年）（以下『琉球～その島と人々』）<sup>(34)</sup>である（写真⑬）。ただ、『琉球～その島と人々』写真の左側大龍柱は折られただけでなく、接続され短小化されている（写真⑭）。先に折られた右側は、胴体や頭部などが損壊されたままで欠損し、根本の残欠が台石に残っている状態だ。

チェンバレン（1850～1935）はイギリスの日本研究家で、明治時代に日本に滞在した。チェンバレンは沖縄についての研究も多く、1893（明治26）年に沖縄を訪れている。その成果をまとめ1895年に刊行したのが『琉球～その島と人々』である。『琉球～その島と人々』掲載写真をチェンバレン自身が撮影したものだとすれば、調査した1893年段階のもので、左側大龍柱は早ければ1893年までに破壊接続されていた。もしチェンバレン自身の撮影でなくても、『琉球～その島と人々』が刊行された1895年までには折られた後、接続されて短小化していたことになる。大龍柱の形状としては、現存の写真では確認できていないが、「写真⑬」の姿になる以前に左側も折られたまま接続されず、左右両方とも欠損したものがあったことになる。



上：写図⑬ Chamberlain, Basil Hall: *The Luchu Islands and Their Inhabitants*, a three part extracted article from *The Geographical Journals of 1895 The Luchu Islands and Their Inhabitants* の図版  
 下：写図⑭ 写図⑬の大龍柱部分を拡大した。右側は破壊されたまま、左側は短小化している



上：写図⑮ レブンウォースの“*The Loochoo Islands*”  
 下：写図⑯ 首里城正殿の絵葉書

それでは、破壊されたまま放置されていた右側が接続され、短小化されながら修復されたのはいつか。チャールズ・S・レブンウォース (Charles.S. Leavenworth) の“*The Loochoo Islands* (1905年)” (以下『琉球の島々』) 掲載の首里城正殿の写真 (写図⑮) が参考になる。<sup>(35)</sup> この写真は、大龍柱が石階段登り口左右に写るが、両方とも短小化している。左側は短小化し、右側は損壊したままだったチェンバレン写真より、後の撮影となる。

レブンウォース (1874～1949) はアメリカの歴史学者で、中国にわたり上海の南洋帝大教授となった。レブンウォースが沖縄を訪れたのは1904 (明治37) 年で、古記録などの調査をしている。その成果が1905年に出版された『琉球の島々』だ。『琉球の島々』写真には兵士と思われる人物が2人写っているので、写真は日本軍駐屯期のものであるかもしれない。いずれにしても、『琉球の島々』が刊行された1905年段階での大龍柱は、左右両方とも破壊後補修され短小化したものだった。

左側が短小で右側が欠損した状態はチェンバレンの『琉球～その島と人々』刊行 (1895年) 以前で、左も右も接続されて短小化した状態はレブンウォース『琉球の島々』刊行 (1905年) 以前ということになる。その間には、1896年の日本軍の首里城からの撤収があった。両方が短小化された形で補修された大龍柱は、その後、正面向きの姿で明治大正期を過ごしたことになる (写図⑯)。

ルヴェルトが写真 (1877年) で確認された大龍柱の「琉球国末形状」は、「正面向き+背丈高」である。この「正面向き+背丈高」の形状は「伊藤家首里城正殿写真」や「東



上：写図⑰ 伊東忠太『琉球』の図版  
下：写図⑱ 写図⑰の大龍柱部分を拡大した

博正殿写真A」でも確認され、大龍柱の破壊が始まったのは1887(明治20)年からだった。その破壊は右側を折られることから始まった。その最初の破壊後に右側が折られた姿をとらえたのが「宮内庁正殿写真」となる。大龍柱はその後、左側が折られて接続され、折られたままだった右側も接続された。短小化されながらも左右の大龍柱が正面を向いた形となったのは、レブンウォース『琉球の島々』刊行(1905年)以前であり、本稿では日本軍が撤収した1896(明治29)年だと推定しておきたい。

明治大正期の大龍柱の形状の変化をたどってみた。これで確認できることは、ルヴェルトガ写真以降、昭和修復までのおよそ50年、大龍柱は正面向きで、その向き自体は変更されなかったということである。向きを変えたのは、「正殿」を沖縄神社拝殿として利用した時期だった。首里城内には

大正末に沖縄神社が創建され、沖縄戦で破壊されるまで存在した。その間、「正殿」は沖縄神社の拝殿とされ、拝殿として修復された(昭和修復)。この昭和修復で大龍柱は相対向きに変更されたのである。<sup>(36)</sup>大龍柱の向き改変は、修復の名目で行われていた。

「写図⑰」は伊東忠太『琉球—建築文化』<1942(昭和17)年>の口絵写真で、沖縄神社拝殿となった「正殿」である。「写図⑱」は大龍柱部分の拡大。大龍柱は相対で設置されており、写真の撮影時期は修復を終えた後なので、1933(昭和8)年以降である。伊東は1924(大正13)年に沖縄を調査に訪れ、正殿の保存や「国宝指定」にもかかわっている。調査を基に「琉球紀行」を著している。『琉球』は「琉球紀行」を再録したものだ。<sup>(37)</sup>

この昭和修復で相対向きへ「変更」されたという事実への異論は存在しないが、その意味の理解は分かれている。「本来の姿」に復旧したという理解と、「改変」したという理解だ。これはそのまま相対説と正面説の違いとも結びつく。この向き変更を、平成復元では修復を機に「本来の姿」に戻したとしている。真栄平房敬は、この相対向きへの変更は古老などへの聞き取りを踏まえ、琉球国末の姿に戻したものだとしている。ただ、昭和修復の当時でも、歴史家の比嘉春潮が相対向きへの変更に対し、異議申し立てを行っていた。<sup>(38)</sup>

真栄平房敬は1921(大正10)年生まれで、相対向きへの変更時期の年齢は10代である。一方で、昭和修復の際の向き変更「改変」だとして異議を唱えた比嘉春潮は1883(明治16)年生まれだ。比嘉春潮が幼少のころはまだ大龍柱は琉球国末の姿のままだった。比嘉春潮がその姿を実見したとは考えにくいだが、生年は比嘉春潮の異議申し立ての重みとなる。

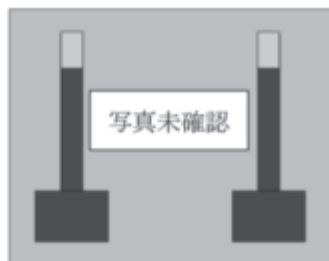
ルヴェルトガ写真以降の大龍柱の向きから確認できることは、琉球国末から首里城接收後も、大龍柱の姿は「正面向き+背丈高」だったということ。この事実は、『寸法記』絵図は、向き自体を描いたものではないとする正面説の説明と一致する。ルヴェルトガ写真から首里城接收後の大龍柱の形状変化をたどれば、大龍柱の「本来の向き」は正面向きであり、相対向きである可能性は存在しない。

#### IV 形状変化の整理と確認

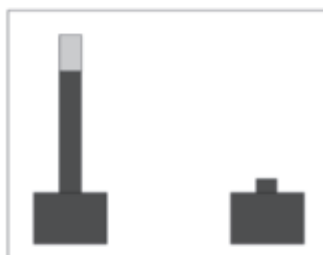
琉球国末の1877（光緒3、明治10）年から沖縄戦で1945（昭和20）年に破壊されるまで、正殿大龍柱の形状変化を写真資料などで追いかけてみた。写真は撮影時期や撮影者を特定できないものもあるが、形状変化や公表時期など周辺情報を総合することで、撮影時期の前後などを絞り込むことが



「左右とも、正面向き+背丈高」  
形状図①



「左右とも、正面向き+背丈高」  
形状図②



「左原型+右破損」  
形状図③



「左破損+右破損」  
形状図④

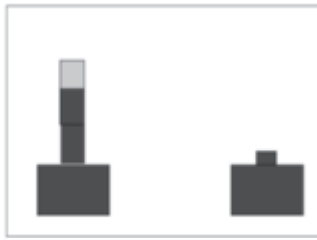
できた。大龍柱は経年劣化のほか外からの力が加わらないかぎり形状が大きく変化することはない。しかも、その損壊による変化は逆行しない。この基本的前提を踏まえて、確認した大龍柱の形状変化を概略図で示せば「形状図①」から「形状図⑦」のようになる。図化する際、正面向きの龍頭部分は表現しにくいので、相対向きを合わせて柱と頭部分は色で分けした。

「形状図①」はルヴェルトガ写真（写図②）が記録した大龍柱の形状だ。この形状は琉球国末の1877年5月のもので、この時期の首里城は、尚泰王が居住し御城として実際に利用されていた。大龍柱は左右とも「正面向き+背丈高」である。御庭には浮道があり、磚も敷かれていた。この琉球国末（1877年）の大龍柱の状態を、御庭の浮道を含めて「琉球国末形状」とする。

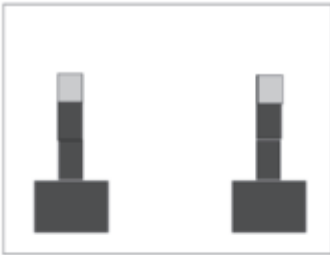
平成復元が基準とした『寸法記』（1786年）時の実際の向きを確定するには、この「琉球国末形状」（形状図①）の始期をいつまで遡れるかが問題となる。始期を『寸法記』まで遡れるなら、「琉球国末形状」が大龍柱の「本来の姿」となる。『寸法記』からルヴェルトガ写真までの間における向き変更の事実は確認されていないので、本稿では「琉球国末形状」が平成復元の基準とする「本来の向き」だと考えている。

「琉球国末形状」が変更された時期は明確ではない。現在確認できる大龍柱が両方とも「正面向き+背丈高」の写真は3点（ルヴェルトガ写真、「伊藤家首里城正殿写真」や「東博正殿写真A」）である。浮道は少なくとも1882（明治15年）までは存在していた。

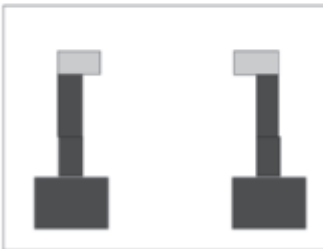
「形状図②」は、大龍柱が「形状図①」と同じで、「正面向き+背丈高」だが浮道は破壊されている。この状態を明確に示す写真は確認できていないが、「伊藤家首里城正殿写真」などは、これに該当する可能性がある。大龍柱の右側が破壊されたのは「宮内庁正殿写真」や亀川盛棟の詩を基に1887（明治20）年1月だと考えると、「形状図②」は



「左短小化+右破損」  
形状図⑤



「左右とも、正面向+短小化」  
形状図⑥



「左右とも、相対向+短小化」  
形状図⑦

1887年以前となる。

「形状図③」は右側大龍柱のみが折られた状態。「宮内庁正殿写真」がこれに該当する。大龍柱は1887年に右側が折られたが、左側は無傷で琉球国末からの姿だった。破壊の順序は、「形状図③」後、左側も折られ「形状図④」のように左右大龍柱とも損壊していた段階が考えられる。ただ、その形状を記録した写真は確認できない。しかし、時間の経緯から両方が折られた状態が短時間でも存在している。

破壊後の補修による短小化は左側から始まった。「形状図⑤」がそれである。後に折られた左側が先に補修（接続され短小化）されている。理由は分からない。チェンバレン『琉球～その島と人々』の写真が「形状図⑤」の状態だ。チェンバレンは1893（明治26）年に沖縄を訪れ、『琉球～その島と人々』を1895年に刊行している。同書写真（写図⑬）をチェンバレンが1893年に撮影したものだとすれば、1893年段階の大龍柱は「形状図⑤」の状態だった。左側は接続で短小化される「改変」がなされたが、正面向きは「形状図③」と同じだ。つまり、向きの「改変」はない。

その次の段階である「形状図⑥」は、放置されていた右側も補修がなされ短小化し、左右両方とも短小化した状態である。この「形状図⑥」状態がレブンウォースの『琉球の島々』（1905年、明治38年）の写真（写図⑮）である。右側の補修時期は1905年以前となる。

「形状図⑤」（1893年か1895年）と「形状図⑥」（1905年）の間に日本軍は、首里城から撤収<1896（明治29）年>している。ここまでの経緯を考えれば、日本軍は撤収する際、右側を補修したと考えていだろう。日本軍が撤収した1896年から「形状図⑥」の状態だと考えたい。この「形状図⑥」の形を記録した写真は多い。大龍柱の「正面向き+短小化」という形は、1896（明治29）年から、昭和修復で向きが相対に変えられるまで維持されたのである。「形状図⑦」に「改変」された

のは昭和修復である。琉球国末の1877年から1928年（明治大正期、そして昭和修復前）までのおよそ50年間、三代目大龍柱は、破壊と補修（接続+短小化）を経験したが、その向きは変えられていなかった。

年代	左	右	向き	形状図
1877（明治10）	原型	原型	正面	図①
1882（明治15）	原型	原型	正面	図①②
1887（明治20）	原型	損壊	正面	図③
1895（明治38）	損壊+接続+短小化	損壊	正面	図⑤
1896（明治29）	損壊+接続+短小化	損壊+接続+短小化	正面	図⑥
1905（明治38）	損壊+接続+短小化	損壊+接続+短小化	正面	図⑥
）	損壊+接続+短小化	損壊+接続+短小化	正面	図⑥
1928（昭和3）	損壊+接続+短小化 +向き改変	損壊+接続+短小化 +向き改変	相対	図⑦

首里城を管理駐屯した日本軍は、大龍柱を破壊したが補修して撤収していた。その破壊・補修で、大龍柱の背丈は短小化されたが、向きは「改変」されなかった。これを踏まえれば、大龍柱の破壊と補修による「改変」は、背丈と向きで別に考える必要がある。背丈の「改変」は左右それぞれで異なる経緯でなされていた。そして、向きの「改変」は昭和修復に限定されることが確認できたことになる。

大龍柱は琉球国末の1877年の姿で「琉球処分」の激動を乗り越え、1887年に右側が最初に折られた。そして、左側も折られるが正面向きのまま短小化されて接続された。右側も1896年までには、短小化されたが正面向きのまま接続された。日本軍は大龍柱を破壊したが、その向きは変えていない。それゆえに、明治大正期（そして昭和修復前まで）の写真に、相対向き大龍柱は存在しない。

大龍柱は1877年以降、明治大正期は正面向きだったことが明らかになり、相対説成立の前提は存在しないことが確認された。この前提がなくても相対説が成立するには、『百浦添御普請絵図帳』（1846年）以降（あるいは伊従説によれば、1866年以降）、1877年までの間に「正面への向き変更」の事実が存在していなければならない。しかし、この間の向き変更は、従来の首里城研究では示されていない。

## V おわりに

本稿では、琉球国末のルヴェルトが写真から、写真資料をたどり首里城正殿大龍柱の変化の経緯を明らかにした。そして、首里城接收後に駐屯していた日本軍は大龍柱を折った後、接続し修復する過程で短小化させたが、向きは「改変」しなかったことを確認した。大龍柱は接收以前の1877（光緒3、明治10）年から日本軍撤収後も正面向きであり、相対に向きを「改変」したのは沖縄神社としての昭和修復だった。これらの事実が確認されたことで、相対説の日本軍が大龍柱の向きを正面へ変更したという前提は成立しなくなった。置県後の向きをめぐる論点は先送りされていたというより、相対説では十分に説明できない点だったのである。

「（正殿は）1712年に再建された後、建物の増改築や重修などが行われはしたものの、その建築的なコンセプトに大きな変更がないまま琉球処分を迎えたはずだ」「王国時代において、大龍柱の台座を動かすことはありえない」という平成復元における考え方を踏まえれば、大龍柱が琉球国末に正面を向いていたなら、復元の基準となった『寸法記』の時代もまた正面を向いていたことになるだろう。『寸法記』（1768年）と『百浦添御普請絵図帳』（1846年）の絵図は、向きを「写實的」に示したのではないとする正面説の「解説」が適切だった。より端的に言えば、相対説は絵図資料を「誤読」していたのである。

琉球国併合のために派遣された日本軍（熊本鎮台など）の兵士が、首里城内に駐屯していた時期に正殿大龍柱を折った。それでも、補修することで背丈は短小化されたものの「琉球国末形状」に近い形に近づけようとしていた。琉球国を併合した日本は、かつての琉球の国家祭祀を改変し、天皇を頂点とする祭祀体制へ再編しようと何度も試みている。その一つとして、沖縄神社が大正末に首里城内に創建され、「正殿」は拝殿とされた。そして、沖縄神社拝殿として「正殿」は修復され、大龍柱の向きが「改変」されたのである。つまり、大龍柱の向きを「改変」したのは、軍隊ではなくいわば日本の文化宗教政策だった。

かつて琉球国の王城として外交儀礼や国家祭祀が営まれた空間は、明治政府による接收後さまざまに「再編」され「改変」された。本稿で取り上げた大龍柱の「改変」はその一つに過ぎない。正殿大龍柱はほかに見られない琉球独自の造形物であり、琉球の歴史や文化の個性を象徴するものである。そして、それ故に首里城の象徴的な存在として、大龍柱の向きが議論的となっていた。首里城の近

代の歩み、そして沖縄の近代史自体が「改変」の歴史でもあるということもできる。その視点で言えば、大龍柱の「改変」史は、大龍柱や正殿、そして首里城の問題にとどまらない。それは、琉球処分や沖縄近代史と直結しているのである。だからこそ、大龍柱の向きは何度も問い直されていた。2019年秋の首里城火災は不幸な出来事ではあったが、沖縄社会が首里城や琉球の歴史について改めて考える機会を与えることになった。

形状変化を琉球国末の首里城接收前から見ることで、大龍柱の「本来の向き」にアプローチした本稿の結論は、大龍柱を考える会のかつての会長・宮里朝光（故人）や西村貞雄らと同じ正面向きとなった。今後も、昭和修復の「改変」以前に相対向きだった大龍柱を記録した写真が見いだされることはないだろう。なぜなら、相対向きだった事実は存在せず、相対向きの写真が撮られることはないからである。2019年の火災を受けた首里城の復旧では、正殿大龍柱の向きを正面向きに設置する必要がある。

#### 【注】

- (1) 首里城の戦後の復元について、首里城関係機関は「平成復元」とする。筆者は歴史的経緯も含めて「戦後復元」と呼ぶ方がいいと考えているが、本稿では混乱をさけるため「平成復元」を用いた。
- (2) 首里城に関しては最新の情報も含めて「首里城公園」HP (<http://oki-park.jp/shurijo/>) を参照。
- (3) 沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録—平成の復元—』（沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所、1995年）86頁、首里城公園友の会編『首里城の復元—正殿復元の考え方・根拠を中心に』（海洋博覧会記念公園管理財団、2003年）43頁。ここで「国宝指定」としているのは、古社寺保存法による「特別保護建造物」の指定のこと。その後1929年の「国宝保存法」により国宝とみなされた。平成復元に関する資料の多くは基本的に公開されている。本稿では、この『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録—平成の復元—』、『首里城の復元—正殿復元の考え方・根拠を中心に』を主に参照している。
- (4) 大龍柱を考える会は1990年代から活動している。当時の会長・宮里朝光（故人）による「首里城復元と風水」（首里城復元期成会編『首里城復元期成会創立三十周年 甦った首里城』首里城復元期成会、2003年、177頁以下）には主張や根拠が端的にまとめられている。現在の同会（太田朝章会長）は2019年の火災を受け、那覇市議会（2020年3月18日）や県議会（2020年9月8日）へ正面向きにするよう陳情書を提出したほか、講演会などを行っている。平成復元で大龍柱の製作にかかわった西村貞雄（琉球大学名誉教授）も正面向き説を唱え、論考は新聞などにも多く発表されている。論文などについては「注21」。また、2019年の火災を受け首里城再興研究会（共同代表・石原昌家沖縄国際大学名誉教授ら12人）が組織され、市民参加の場を設けることを提案し、シンポジウムなどを定期的に開催している。筆者も2020年11月22日に開催された「首里城再興に関する公開討論会」に参加し、ルヴェルトが写真の意味などを説明した（ZOOM参加）。
- (5) 接收後から沖縄戦で破壊されるまでの首里城の全体像は必ずしも明らかになっていない。この時期を俯瞰した論文として、真栄平房敬「近代の首里城」（首里城復元期成会編『甦る首里城—歴史と復元—』首里城復元期成会、1993年、272 - 344頁）がある。また、宮城栄治「古都首里のまちづくりにむけて—歴史の変遷の検証—1」（『首里城研究』No.2、首里城公園友の会、1996年、31 - 40頁）は『首里市市制10周年記念誌』をベースに関連事項を年表にしている。近代の首里城の利用については、真栄平房昭「廃城と祭神—首里城の神社創設と為朝伝承について」、首里城接收については後田多敦「首里城の権利をめぐる近現代史」（いずれも『うるまネシア』23号、21世紀同人会、2020年）などがある。新城栄徳「琉文21」（<http://ryubun21.net>）には、首里城正殿の古写真などが多く掲載されている。
- (6) 前掲の『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』や『首里城の復元』では、復元的前提として首里城の歴史を概観している。

- (7) 「安国山樹花木之記碑」は沖縄戦で破損した。ただ、破損を免れた部分が沖縄県立博物館・美術館に保管されている。
- (8) 松田道之「琉球処分 下」(『琉球所属問題関係資料 第七巻』本邦書籍、1980年、157頁以下)。原剛『明治期国土防衛史』(錦正社、2002年)167頁以下。
- (9) 真栄平房昭『琉球海域史論(下)―海防・情報・近代―』(榕樹書林、2020年)480頁以下に首里城接収や資料についての詳しい説明がある。
- (10) 『首里城関係資料集』(沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部、1987年)には主な根拠資料が収録されている。
- (11) 前掲『首里城の復元』48 - 57頁。
- (12) 前掲『首里城の復元』の第2章「復元の前提」、第3章「正殿の復元」などで前提や考え方を説明している。
- (13) 前掲『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』は計画・設計の記録を収録している。
- (14) 前掲『首里城の復元』42頁。
- (15) 前掲『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』86頁。前掲『首里城の復元』43頁。
- (16) 野々村孝男『首里城を救った男 阪谷良之進・柳田菊造の軌跡』(ニライ社、1999年)に詳しい。
- (17) 前掲『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』91 - 92頁。『首里城の復元』では70頁で触れている。
- (18) 前掲『首里城の復元』71頁。
- (19) 前掲『首里城の復元』70頁。
- (20) 前掲『首里城の復元』71頁。
- (21) 西村貞雄は大龍柱について多くの論考を発表している。「龍柱について」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』33号、琉球大学教育学部、1988年、133 - 160頁)、「首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察」(『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』42号、琉球大学教育学部、1993年、95 - 105頁)、「首里城正殿の龍についての考察」(『琉球大学教育学部音楽科論集』2号、琉球大学教育学部音楽科、1997年、179 - 193頁)など。
- (22) 高良倉吉「大龍柱の向き」『琉球王府 首里城』(ぎょうせい、1993年)161頁。伊従勉は「龍柱の向きは1712年から1768年まで前を向いていたものが、1768年に対向に変えられたとみられる」として、大龍柱は1768年で相対向きに変更されたと考えている(伊従勉『琉球祭祀空間の研究―カミとヒトの環境学』(中央公論美術出版、2005年、567頁)。
- (23) 高良倉吉「首里城正殿の大龍柱の向きについての覚書」(『首里城研究』No.01、首里城公園友の会、1994年、25 - 30頁)。
- (24) 伊従勉「首里城正殿と大龍柱の検討(上)」(『沖縄タイムス』2020年11月11日)。また伊従は「時代により向きが変わった事実は研究者間では共通認識」とも書いている。しかし、正面説からすれば、「時代により向きが変わった事実は存在せず、昭和の沖縄神社としての修復で向きは「改変」されたことになる。
- (25) 「描かれた首里城正殿の虚実」(『沖縄県史 図説編 前近代』沖縄県教育委員会、2019年、154頁以下)や『東京大学史料編纂所附属 画像史料解析センター通信』第90号(東京大学史料編纂所、2020年)などは多くの絵図を紹介している。
- (26) Hervé Bernard 「NEPTUNIA」260号(2010年)pp.33-40。ルヴェルトガ写真については、後田多敦「確認された首里城最古の写真」(『沖縄タイムス』2020年11月26日)、同「ルヴェルトガの正殿写真」(『琉球新報』2020年12月1日)。ルヴェルトガの琉球訪問については、熊谷謙介「1877年の首里城訪問 フランス人が見た琉球」(上・中・下)(『沖縄タイムス』2020年11月20日から22日)。熊谷謙介が『非文字資料研究』23号(神奈川大学非文字資料研究センター、2021年、47頁以下)でルヴェルトガの「琉球諸島紀行」を翻訳紹介している。
- (27) 『球陽』は、王府が漢文、編年体で記した琉球国の正史。本巻(正巻22・付巻3)と外巻《遺老説伝》か



らなる。1745年に編集を完了したが、その後も書き継がれた。『球陽』（角川書店、1974年）で原文と読み下し文が利用できる。尚家文書の『光緒三年丁丑 御書院日記』（那覇市蔵）のなかに4月1日（旧暦。新暦では5月13日）にフランス人らが来琉し、フランス人7人などが3日（新暦5月15日）に首里城を訪問したとする記述があるということが分かった（筆者は未見）。

- (28) M.Jules Revertégat “Une Visite aux îles Lou-Tchou” 1882 Paris. <「琉球諸島紀行」『ル・ツール・デュ・モンド（『世界一周旅行』）』（1882年度第2巻）>。前掲・西村「首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察」。
- (29) 「伊藤家首里城正殿写真」は新城栄徳「琉文21」（<http://ryubun21.net>）より。同写真は現在沖縄県立図書館蔵。「東博正殿写真A」は東京国立博物館「研究情報アーカイブズ」（<https://webarchives.tnm.jp/database>）より。同写真は『東京国立博物館所蔵 幕末明治期写真資料目録1』（国書刊行会、1999年）にも収録されている。「東博正殿写真A」については本稿と同趣旨のことを後田多敦「東京国立博物館蔵 首里城古写真を考える」（『沖縄タイムス』2021年3月24日）でも論じた。
- (30) 「伊藤家首里城正殿写真」とギルマールとの関係については、後田多敦「ギルマール写真と首里城正殿」（上・下）（『沖縄タイムス』2021年1月27日、28日付）。後田多敦「ギルマール写真と伊藤勝一収集首里城正殿写真」（『News Letter』No.46、神奈川大学非文字資料研究センター、2021年）。
- (31) 比嘉朝健「琉球の石彫刻龍柱」（『アトリエ』第四巻第三号、アトリエ社、1927年）20 - 21頁。
- (32) 宮内庁書陵部編『明治天皇 邦を知り国を治める一近代の国見と天皇のまなざし』（宮内庁、2015年）48 - 49頁。
- (33) 上里賢一「資料紹介 毛有慶『竹蔭詩稿抄』」（『日本東洋文化論集』第5号、琉球大学法文学部、1999年）。琉球救国運動については、後田多敦『琉球救国運動—抗日の思想と行動』（出版舎 Mugen、2010年）を参照。
- (34) バジル・ホール・チェンバレンの“The Luchu Islands and Their Inhabitants”（1895年）（以下『琉球～その島と人々』）。チェンバレンの同書や沖縄研究については、山口栄鉄の『チェンバレンの琉球・沖縄発見』（芙蓉書房出版、2016年）など、多くの研究がある。また、山口には『琉球 異邦典籍と史料』（月刊沖縄社、1977年）など、琉球・沖縄に関する欧文文献を紹介する著作が多くある。また、図版については、ラブ・オーシェリ／上原正稔『青い目が見た「大琉球」』（ニライ社、1987年）が多くを紹介していて貴重だ。
- (35) レブンウォースの“The Loochoo Islands（1905年）”（以下『琉球の島々』）。同書は、山口栄鉄／新川右好訳『琉球の島々 一九〇五年』（沖縄タイムス社、2005年）で訳されている。横山学編『琉球所属問題関係資料』第5巻（本邦書籍、1980年）にレブンウォースの“The Loochoo Islands”の影印本が収録されている。
- (36) 前掲・野々村『首里城を救った男 阪谷良之進・柳田菊造の軌跡』は昭和修復についての貴重な記録を紹介する。
- (37) 伊東忠太『琉球—建築文化』（東峰書房、1942年）。首里城は国から払い下げられた後、各種の利用がなされたが、正殿は老朽化が進み取り壊されることになった。鎌倉芳太郎が伊東忠太に働きかけて阻止した。そして、「正殿」は城内に建立された沖縄神社拝殿となり、大龍柱の向きを変えた昭和の修復となる。その経緯や修復については、前掲の真栄平「近代の首里城」や野々村『首里城を救った男』など参照。鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）には首里城正殿を含む、貴重な写真が収録されている。復元の根拠資料となった『寸法記』も鎌倉が収集した資料である。本稿では論じていないが、鎌倉や伊東、阪谷、柳田は大正、昭和期の首里城に大きくかかわった人物である。
- (38) 戦前に昭和修復で相対向きへ変えられたことを知った比嘉は、正しい向きは正面向きだと伊東忠太へ伝え、さらにそのことを『琉球新報』主筆の又吉康和へも書いて送ったが、沖縄戦で焼失するまでそのままだったという（『比嘉春潮全集』5巻、沖縄タイムス社、1971年、585 - 587頁）。